

# 報 籠 屋 新 聞

本社所在地  
東京 成田  
千葉県鴨川市  
代 623

## < 教室前出屋か >

季節はずれの花成盛り

今月十九日に流山市の田東寺で社主の「竹語り」が聞かれる。手に手をとって皆で出かけよう。竹にまつゆゑ

おもしろい話が聴けるよ。

六月十九日 流山市の田東寺

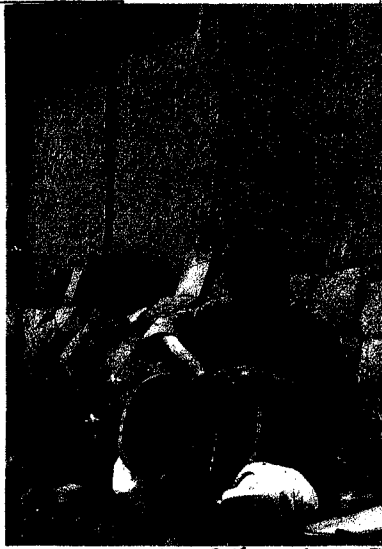
七月八日 東京ビッグサイトのゾク

ズア会場でお天演

十月下旬 周防大島(もこかしら)

右衛門市広瀬(もこ)で

カゴ修理とカゴ編み



カゴ修理 於羽須美村 荒川健一

十月末 大分県由布市の農園にてカゴ修理を申し受ける。

十二月初 宮崎県諸塚村でカゴ編み教室

十一月三日 諸塚村上塚原神社祭礼で猛虎舞の猿蓑まの刑座をつとめる。

十一月十日 流山市真澄屋で

## 計 報

本(山田)堀也が逝った。社主が始めて会したのは昭和四十三年(一九六八年)である。社主はトカラの臥蛇島で暮らしていたのだが、本(山田)が南いたバンヤン・アマモリマ(入)諏訪(島)に面会を行った。時々にまつる竹の巨屋であった。

(被)写体・社主、写真荒川健一、三井山山銀士

六月十九日の田東寺の会の主催者(アツシ)の自然食品店が閉じてくゆる教室である。くゆる日程は後刻告知します。

どの会場でも次の本が入りまき、  
『やさしく編む 竹細工入門』  
『やさしく組む 竹工芸』  
(日 出版)

創刊33年の  
ギョーカイ系  
情報系

ただいま 読者  
カクトクカンパニ  
希望者はご一報を

振替用紙に  
振り替へて  
お申し込みは  
ダイヤル  
口座番号  
00160-1-11999  
加者名 籠屋新聞社

オ九回 ナオの南國語り

「のたうち回る」と「2」

6月16日(土) PM13:00 GATA

「前回」その「1」のテーマは「結論は

先送りにはしよう」であった。捨て聖

一遍も、清僧の空海も、そして、短に

「母なるガンジール」を面白かした

ガンジールも、のたうち回っていた。

捨てきれないものである。その姿が

美しいのだ。

今回「2」は「複合的回答は無」

である。先が見えないから不安になり、

また「染」の「2」で、指針を、非あり

人（彼女）を「染」は「染」は「染」は「染」

初めに、指針が不在であることに気づく

のか、「ヨイ、ドミン」で「競争しよう」

そして、「ゴールのテープ」で「後」

互の顔と「ミ」あわせて「笑」に「3」

あ。

南島学エッセイ 五月号 配信

※特集「知覚の考史考現史」

◎皮層の理解力（稲垣ナオ）

◎「南風語り」の会のおもしろさ

オ八回「うつつのー音とコト」ガツ

（船木栞生）

「うつつ」というコトに現れた

人間の本源的な模倣「表象能力」

そして名指されることへの素材

なおどうも読み解か

◎ぬるぬるの「コト」エッセイ「Phone」

の広告表現にみる情報社会の変

容（橋爪伸）

論議の固まりの「コト」エッセイに

なせ「ぬるぬる」という形容がな

されるのか（中略）膨大な

情報への接続能力を得た代

償としての現代的な不安と

考察する

トカラ 藤 http://user.ecc.u-tokyo.ac.jp/~c080007/nantogaku

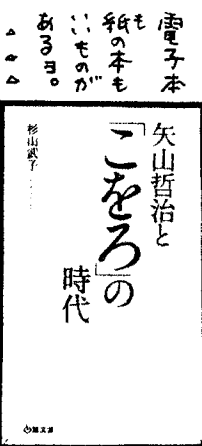
30 GANGA



村はずれの本道は 大原嶺の並木道  
銀上に大きな荷物をのせて 女たちが住く  
色とりどりのサリーと 黒い肌  
両側に並がる延々たる荒野  
ワイルダーネス さまよふところ  
太陽の影の運命の上に 入道雲は踊り  
石の肌をした鬮子たちが 敬声をもらす  
娘たちは旗に覆れて 安らかに眠り  
演劇の囁みも遠く頃  
ガンジヤは慮む 目覚めの時を  
これが求めていた 幸福というものだ  
これが天国 神々の時だ  
過去は過ぎ去り 未来は未だ来ない  
水道に流くいま いま いま……

ホンガヤ娘の字摩と維摩を連れて、5ヶ月  
間インドをタビしたときに書いた詩。  
画もホンガの筆になる。社主義の娘の便り  
から転載した。1992年の作品。

◎地球温暖化とエネルギー問題の危機  
（橋爪伸）  
「原子力ネオサニス」「スマートグリッド」「グリーン  
ニューデール」etc. エネルギーをめぐる「競い合う」  
さまざまなおとりのうらんと「カ」西断。今や全  
世界的な問題となったCO<sub>2</sub>削減「ゲーム」の表で  
は、非民主的かつ中央集权的な電力供給の戦  
時体制が温存され続ける。（トカラ）



「いさをる」という同人誌があることは知っていた。島屋敏雄氏が書いていたから

同人は長崎三向帝大の学生時代はこの誌に深くかかわっていたようだ。誌と書引してきた矢山哲治の生と追ったまじである。昭和十一年に満二十四才

の生はとらえらるのだが、戦時下の統制下であらゆる不自由を克服して批判し続けようとした矢山の内心と著者は解剖してくる。「もし矢山にマルクス主義や反戦

思想に触れる経験があったら、精神的な打撃はもっと小さくてすんだかもしれない」と分析する(一才、旧同人の

戦後の証言)にも心に響かせている。詩人・矢山哲治は作品の削除命令

が当局から出たに忍従するしかなかったのだが、旧同人は、それは絶対平和の思想であると言う。(誌と讀まねいために)反戦でも非戦でもない。不戦だ。戦やないから負けたくない。それは

絶対平和の思想であり、日本の詩歌の根底にある。そのことに著者は驚かしている。軍国主義の下での文化活動がゆじ曲げられようであろうことは想像しうが、表現媒体の確保に魂を潰すことまでは思い及ばなかったのだろう。時代を振り起す光栄作である。



「肥やし」(これは「肥やし」の4巻「辰」収録)

首都の東郊曲辰村と舞舞台にした肥やし(下肥やし)の資料集である。

激しい都市化の動きの中で、こんな世界を描き

出せたものだ、と舌を巻く。社名は「カサイモ」

のトバは知っていた。それが汚穢屋の仮名詞で

あり、蕨村であると言われていた。たしかに、そ

うに使われ方もあったであろうが、同時に、いや、それ以上

大きな意味をもっているのは、肥が村や町の暮らし

と継いでいたことである。下肥運搬船である蕨

面船は、地域の名を採っているが、後には一般名

詞化している。別に「長船」と呼ばれているが、

分限者でなければ所有できないから、また、

多くの収入を得られたようだった。下肥やしはそれほ

ど貴重は資源であった。この本は発見の連続であ

り、身近な暮らしの中から、暮らしの英知を振り起

す作業は、どんなに精緻な理屈も及ばない。

おまけ「南島岩子」(ふとく)

七月二十四日(土) 於 QALIA (梅ヶ丘)

いまでもっと注目されていよう、マンガ家・

山本ナオに魅せられた新進気鋭

の社会学徒の成長場。サカバチヤと

地域研究を不慮する野心的トーク。

山本社会学講義

平成かご屋のブッゴト



PHOTO 円山文雄 (中国 蘇州)

四月四日(日) トラック(二台)にて  
館山へ配達。煤竹製衣椅子五  
脚の修理を終えたので、それを  
納める。  
四月七日(水) 花見、早苗ど。裏山  
を越えた山向うの寺へ。オナリと  
とゴザを持参で。  
四月十三日(土) 十五日 竹合宿。  
「やまぐち組む 竹工藝」(日経新聞)  
の撮影。カヌマン・荒川健一氏  
と三日八食を共にする。

四月二十九日(日) 知人の引越し手伝い  
五月二日 馬場崎氏のタニカ展  
三十年來のインド草履をたたく帰国  
した氏の記念展。お茶の水の画廊に行  
く。  
五月十日 裏山のぼつたうかしミカンの  
収かくとす。  
五月十三日 馬場崎、荒川、山中一行  
来訪。近くに住む磯上氏も合流して  
宴会。  
五月十八日 柏市の名土谷の病院に  
馬淵氏を見舞う。十月、「南島学

四月二十四日(土) 「南国語」  
東京駅八重洲口までバス  
で。二時間、二四〇〇円。  
講題は「うつつ」。  
四月二十六日 ホン旅立つ  
四月二十七日 虫歯治療  
四月二十八日 ホン葬儀  
埼玉國羽生市往復

ライブトークで。ホニホトの素顔と講じてくれ  
る予定の人。夜、日本橋のクラフト店・ヒナタノノ  
で宴会。「光の本」の編集者・エディター・執筆者  
の集い。社主が「隣の物語」と連載中。  
五月二十日 「季刊 東北学」原稿メカリ日。  
「東シナ海の古層」を連載中。  
五月二十九日 ホニ回「南島学」ライブトーク  
小田急線梅ヶ丘駅前のGALLERIAで。稲垣一雄氏  
の「琉球国と沖縄の狭間で想う」  
六月二日 二週間をかけて十三個のかがこを編む  
買物が二十九個、大かこ二個、投げ入れ三  
六月三日 そのうちの五個を市原の砂田さん  
の店に配達。買物が二十四個と山口の「あて  
まん」へ販売をおねがいする。  
六月五日 若い友人五人(タカシ、タイサク、ヨシフキ、  
マシマナミ)来訪。夏のトカラ行ききの打ち合の  
せと飲め会。  
六月十四日 ホン追悼三味線コンサート(宇津摩)  
長瀬まつりの会場で。  
六月十五日 浪山・田更寺で「竹語り」